

「よいデザイン」と「悪いデザイン」について

村 上 憲 一

私はアフリカのモロッコに魅せられて度々足を運んでいます。そこで目にしたことを例にお話します。

モロッコの街、マラケシュやフェズなどの旧市街と新市街は、日干し煉瓦で作られた一枚の壁で“内”と“外”に分けられています。私にとって“よいデザイン”又は“好きなデザイン”は旧市街と呼ばれる城壁に囲まれたメディナやカスバの中にあります。

2千年前の都フェズは、その土地の土や石を材料にして日干し煉瓦を作り、建築家やデザイナーの存在無くして出来上がった世界最大の迷宮都市です。素朴な土の壁に囲まれた中では、6万人以上の住民が今も脈々と通常の生活を繰り返し営んでいます。囲まれているが故、外部から影響を受けて変化することもできずに今も口バと荷車、徒歩が唯一の流通・交通手段です。

壁の中にあるデザインはモスクの宗教上からくる最低限の形態と様式であり、それ以外は、そこに住み続けるために考えられた機能的で自然環境と一体化された“無意識のデザイン”です。

一方、壁の外の新市街は、旧宗主国フランスの影響を受けた建物であったり、経済的な現代の材料で造られた機能的な箱の集合体です。そこには、都市計画によって道路が造られ、デザイナーや建築技師によって新しく造られた街があります。トラックによる豊富な物資の移動があり、バスが走り便利な生活が営まれている、現代の価値観で“意図して創られたデザイン”です。

私は自然発生的に拮がった、“意図せずしてデザイン”された壁の内に入り込むと興奮を憶えます。二千年の時間を超越して存在し続ける壁の内は、私が感じる“良いデザイン”“好きなデザイン”です。

一方、壁の外は専門家たちによって造り上げられた、便利な新しい空間ですが、むしろ人間の非力さを感じるデザインであり、私にとっては“良いと想わないデザイン”です。